

作文の部 市長賞

暖かく、素朴な文化と人々

東久留米市立西中学校

一年

私は、去年たまたま北海道に旅行に行った時、阿寒湖のアイヌコタンというアイヌの人々が住む集落を訪れました。クマやフクロウなど動物の木彫りの置物やアイヌの文様を刺繍した布で作った小物などのお土産屋さんがたくさん並んでいました。アイヌの文様には動物や植物をモチーフにしたものが多く、魔よけの意味もあるそうです。お土産屋のおじいさんが楽器の「ムツクリ」を演奏してくれました。舌で鳴らす弦楽器で、低く響くビョーンという不思議な音色とシンブルなリズムを繰り返す不思議な音楽でした。

また旅の途中、標識に書かれた地名が変わった読み方が多いことに気づきました。調べると、アイヌの人々が使っていた地名が語源になっていくそうです。例えば、「札幌」は

乾いた大きな川を意味する「サツポロベツ」。
知床は大地の行きづまりという意味の「シレ
トク」からきているそうです。

白老町では、「ウポポイ・国立アイヌ民族
博物館」を訪れました。「ウポポイ」はアイ
ヌ語へアイヌ独自の言語で大勢で歌うとい
う意味だそうです。祖父や祖母がアイヌだと
いう、一見して私達と全く変わらない人達も
働いていて、アイヌの暮らしを説明してくれ
たり、アイヌの歴史展示室があったり、ムツ
クリの演奏に合わせて歌うアイヌ語の歌や、
踊りを見ることができました。アイヌの文化
を大切に思い、伝承していくことを誇りにし
ていることが伝わってきました。チセという
アイヌの伝統的な家には、入り口と反対側に
カムイ（神様）が出入りするための神聖な窓
が作られていて、アイヌの人々は信仰心が厚
いんだなと感じました。

東京に住んでいるとなじみがないアイヌで
すが、この旅を通じて、アイヌ文化が好きに

なりました。森羅万象を神としてまつり、自
然の恵みを大切に用いて、こうという考え方
は、自然豊かな北海道になじんでいて、とて
も暖かく、素朴な印象を受けたからです。
北海道や東北の先住民族で、独自の文化や
言語を築いてきたアイヌの人々ですが、明治
以降、本州の日本人と同じ生活や文化を強い
る同化政策が進められたことで、長い間差別
や偏見にあい、現在も偏見が根強く存在し続
けているそうです。
昔は、アイヌ語の使用や狩り・漁・宗教を
禁止され、日本語の使用を強制されたり、土
地を奪われたりしました。その結果、差別や
貧困に苦しみ、人口が減ってしまいました。
今ではアイヌ語で話したり、文化を継承する
人は減ってしまいました。
北海道の行った調査では、大学などへの進
学率や所得水準が、全道平均よりも低かった
り、アイヌの人々への正しい理解が足りない
ために、誤ったイメージから結婚や就職など

で、ひどい言葉を受けたり、不公平な扱いをする人々が今も存在するそうです。こうしたことを恐れて、自身がアイヌであることを隠して生活している人もいます。自分の生まれを隠したり、人として安心して暮らすことができない人が同じ日本にすることに驚きました。

私は、北海道に行くまでアイヌの人々は、なんとなく遠い国の人のような感覚をもっていました。アイヌの人々が令和の時代にあっても、差別を受けていると知りませんでした。でも、実際に訪れたことでアイヌの人々が差別されるのはおかしいと思うし、同時に、アイヌの文化はとても個性的で、面白いと思います。もし、アイヌの文化や生活に興味を持っていなかったら、今でも知らないままだったかもしれません。

差別や偏見を持つ原因の一つは、相手を理解しようとしなからだと思えます。お互いを知ることができれば、自分の思い込みに気

づくことができると思いますが。もう一つの原因は、人々の中には異なることを受け入れるのが怖い人がいて、自分と違う人を差別したり、他の人に偏見を広げたりするのだと思います。でも、自分と違う人を疎外する考え方はものすごくつまらないと思います。なぜなら、みんなが全て一緒だったら逆につまらないからです。私は、異なるからこそ、惹かれることがあって、面白いと思います。

異なることは「悪」ではなく「いいこと」と考えられるようになりたいです。文化や人種に優劣はないと思います。お互いの文化を尊重し、お互いを知ろうとすることが、私達にできる一歩だと思います。

これは、アイヌの人々にだけ当てはまる話ではないと感じます。だからこそ、私はお互いの「違い」や「個性」を認め合うことで、全ての人が共に生きる共生社会につながればいいなと思いました。